

九鬼周造の偶然論における二つの次元の可能性の調和

偶然性から必然性へ展開する動的構造に対する研究の着手点として

黄璐(東北大学文学研究科)

九鬼周造は「偶然性は必然性の否定である」(全集 2, 9; 全集 3, 142 など)としたことは周知されている。九鬼はこのように、必然性を人々が一般的にそれにしたがって考えるものとして前提し、偶然性をその否定として提起した。この主張の証明、つまり当たり前のような必然性とはどのように一般的に存在するか、そしてその否定としての偶然性はどのような存在の仕方をして、如何に必然性の否定であるかについて、かなりの紙幅を費やし、比較的分析的に論じた。その後、九鬼は「偶然性は…必然性の円周にまで展開し得る現実の力である」(全集 2, 187)とし、必然性の否定である偶然性から必然性へまた展開し復帰する動的構造を持ち出した。

この動的構造は如何に実現しうるかについて、九鬼は可能性を媒介にすることによって、偶然性は必然性へ関係すると述べた(全集 3, 115)。九鬼は可能性と必然性とは極限関係にあり、偶然性と不可能性とは極限関係にあると考えたため、偶然性が不可能性から脱して現実になりえたのは、可能性によるのであり、その中に可能性が潜んでいるのであれば、可能性の増大の極限である必然性へまた展開しうるのであるとした。なぜ可能性は増大しうるかについて、「可能とは必然への可能」であり、「必然的存在へ向って足を運ぶ」(全集 3, 113-114)ものだからであるとした。すなわち、九鬼は可能性を自身で以て一つの生きた潜在的な動力または推進力であると考えると理解できる。

このような文脈にしたがい、可能性を *potentiality*、または実存的な可能性と理解し、必ず偶然性を帯びる現実的存在は、自身の内の *potentiality* を自覚し、積極的に増大させることによって、必然性へと復帰するのだと解釈されうる。確かに、*potentiality* は九鬼における可能性の一つの次元である。

同時に、可能性を *possibility* とする次元も九鬼においてはっきり見られる。それは論理的または抽象的可能性である。三角形の概念に対して、現実においては鋭角にでも直角にでも鈍角にでもなりうる。それは三角形の概念が固定の概念のままにとどまり、更なる規定がされていないかまたはその規定に注目しない場合における可能性であり、九鬼がフッサールの言葉で無限な「変形の可能性」(全集 3, 70)といったものである。すなわち、一つの論理的空間(例えば三角形)を尽くす離接(鋭角か直角か鈍角か)の離接肢の一つであり、様相論理学でいう一つの可能世界である。

この二つの次元の可能性からどのように偶然性は必然性へ展開しうるかが問題になる。明らかに可能性を一種の生きた動力とするような九鬼の文章からすれば、*potentiality* としての可能性こそ、「投企」によって必然性へ展開できる。しかし、この向かうべき必然性はどのようなものかが説明できないため、必然性として成立するかが危うい。九鬼は種が木に、蕾が花になるという例を挙げ、種と蕾に予め向かう先を自身の内に含み、潜在的な可能性の力を発揮してそこへたどり着くことが、可能性から必然性への展開であるとも述べた(全集 3, 114-115)。しかし、投企する人間はそうはいかないし、実存的とでもいう必然性に達したところで円周にはなら

ない。

抽象的な可能性から理解すれば、あらゆる可能性は論理的空間を尽くし円周になれるが、お互い矛盾律(一つの選言肢は p と、他は $\sim p$ として)によって排斥しあい、一つの可能性から全論理的空間としての必然性へ展開しえない。

したがって、この動的構造は、*possibility* としての抽象的な可能性の全体、つまり全論理的空間としての必然性が、否定されて、一つの離接肢として、つまり現実的存在としての偶然性になり、偶然性がまた *potentiality* としての実存的な可能性を媒介に、投企の未定の先としての、または客観的で潜在的な合目的性としての必然性に展開する、というように解釈されている(宮野, 2019, 177-180; 古川, 2015, 197)。

本発表は、小浜善信の、九鬼周造は偶然性と必然性とは表裏一体で、弁証法的動的構造を示した(1987, 3-4)、という解釈に基づいて、弁証法的に九鬼の文章を解釈する。必然性へ展開する動的構造を一貫したものとして解釈するために、可能性を、二つの次元に分かれてみるのではなく、両者をつなぐ一貫性を見い出そうとする試みである。

一つの離接肢としての可能性に、生きた動力という性格を与えると、それもまた生きてくる。一つの離接肢は、全体及び他の離接肢を想定しないと自分を全体の内の一つの可能性として自覚しえない。全体が無限であろうと、一つ一つの可能性は全体に本質として規定され全体によって可能たらしめられている。一つの可能性は、自身が他と差異のあることを自覚し、この差異を以て「その」可能性ではなく、自身として「この」可能性であることが可能になる。また、一つの可能性は他のすべての可能性と同じように、全体に属する可能性として、同一である。つまり、一つの可能性は、他の可能性との同一によって、他と互換的であり、そして全体によって可能たらしめられているため、全体とも同一である。こうして抽象的な可能性は差異によってこの可能性自身であり、同一によって全体と一致する。こうして、離接肢としての可能性から全体へ観念的に復帰するのである。

こうした可能性によって必然性へ展開することは、同時に全体への接近、つまり自身の本質への回復であると理解できる。種のようなまだ展開されていない現実性である偶然性は、木になることにより、潜在的な実存的必然性へなることであると同時に、本質としての植物のより完全な表現になりそこへの回復でもある。この本質または実存的必然性は、決まったものである必要はない。可能性の展開において更新されることもありえ、決まった本質にとらわれないことも本質の一部として理解し、人間の可能性の展開の問題の解決を目指す。

参考文献:

九鬼周造(1981),『九鬼周造全集 第二巻』,東京:岩波書店。

———『九鬼周造全集 第三巻』,東京:岩波書店。

———『九鬼周造全集 第十一巻』,東京:岩波書店。

小浜善信(1986),「九鬼周造の哲学-1-「可能性」について」,『神戸外大論叢』,37(1),p391-415。

———(1987),「九鬼周造の哲学-2-同一性と差異性」,『神戸外大論叢』,38(2),p1-24

古川雄嗣(2015),『偶然と運命:九鬼周造の倫理学』,京都:ナカニシヤ出版。

宮野真生子(2019),『出逢いのあわい:九鬼周造存在論理学と邂逅の倫理』,東京:堀の内出版。